

日本宛航空書簡二題

杉原 正樹

「げんかい」2021年3月と5月に、封書料金より高い航空書簡（「航空書簡は本当に安いのか？」）と珍しい名宛国（「外国郵便の宛先」）について駄文を載せてもらった。今回は航空書簡の宛先に関する応用例を考えてみたい。

「げんかい」3月号で航空書簡は均一料金で送れる郵便物であるが、琉球宛は1972年の復帰まで常に航空書簡が高かったことを記した。これは当然のことで、施政権は米国にあっても住民は日本人であり、戦前は沖縄県であった。このため、郵政省も日琉間郵便は政策的に安い料金設定をしており、航空書簡の利用はある意味、想定外であったろう。では、日本の航空書簡で宛先が“想定内”の日本であり、且つ“正規の使用例”があった、と言えどどのようなカバーを思い浮かべられるだろうか？

図1を見ていただきたい。その日本宛航空書簡の正規使用例である。1959年から1970年まで開局していた南米航路船内局から差し出された航空書簡がこれに該当する。戦前も、そして戦後の1970年代初頭まで組織的な南米への移住があり、大阪商船（のちの商船三井）の貨客船3隻に船内局が設置されていた。図1はロサンゼルス入港3日前に南米移住者がブラジル丸船内で投函、現地で米国郵政に引き渡され、航空機で日本に運ばれたものである。戦前と異なり、南米航路（青年の船関係も同じ）差出の日本宛郵便物も外国郵便扱いと規定され、欧文印での抹消、料金は船内局の位置によって異なっていた。船内局差出でも航空書簡は日本宛を含め、均一であったから“正規の使用例”となる。尚、残されている南米航路船内印の大部分は東航（日本→南米行）時のカバー類であり、西航（南米→日本行）中での船内印はどの局であっても大変少ないことを付記しておく。

1968年から始まった青年の船関連も同じであり、青年の船 船内局引受押印依頼時の返送は第一地帯宛が適用されていた。図2は日本宛ではないが、東南アジア青年の船から差し出された香港宛航空書簡である。ちなみにこの航空書簡は、乗船者が香港にいる知人に同地で再会しようとの内容であり、開局初日とは言え、郵趣性が排除できそうなアイテムである。

同じ日本宛でも図3は国内使用で、航空書簡の「適正使用」とはならず、便宜使用例となる。1949年の航空書簡発行以降、1960年代中頃まで貿易会社が取引先との通信用に大量に買い込み、中には会社名・住所を予め印刷して使っていた例もある（本例はそれに該当）。宛先を気にしないで使えること、電報！やテレックス（知らない人はWebで検索）は料金も高く、安価なアナログ通信として利便性が評価されたことが多用なビジネス需要に結びついた。

図3は英文タイプで打っており、局員は「航空書簡＋英文＝外国郵便」の習慣的反応で欧文印抹消し、恐らく東京空港局に送付したのだろう。同局で国内便と気付き配達局に送ったため、到着が1日程度遅れたと思われる。封書速達料金（35円）より高くとも社用であること、料金が高い安いより手許にある航空書簡を手取り早く使った結果であろう。

戦前でも外信葉書の国内使用は相当に少ないが、航空書簡の国内使用、特に非郵趣家便はほとんど存在しないのではなかろうか。



図1: BRAZIL-MARU SEA POST 1965.3.13 東京・新宿宛

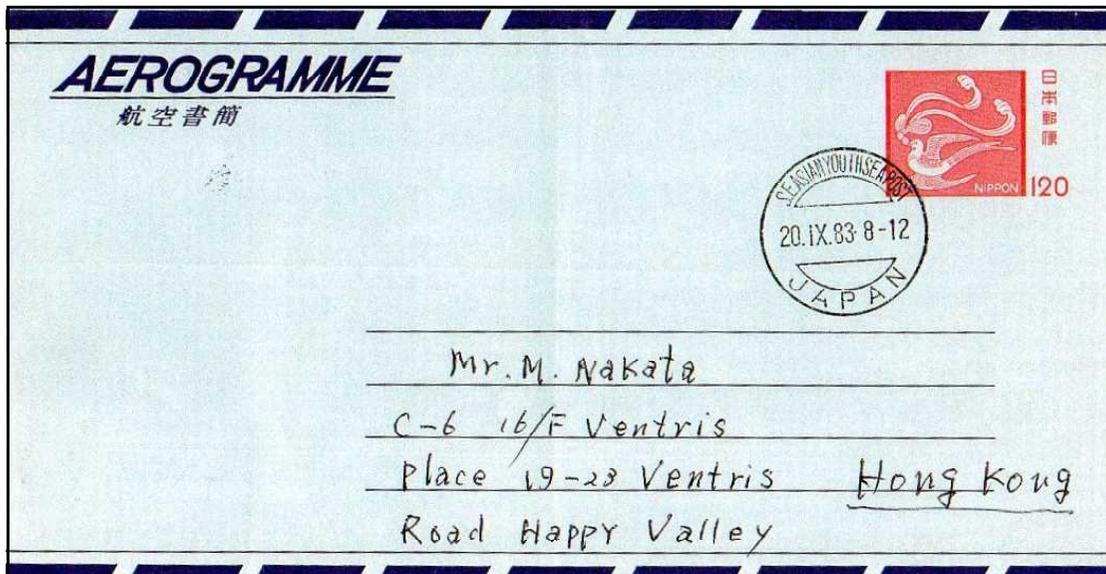


図2: S. E. ASIAN YOUTH SEA POST 1983.9.20 香港宛



図3: TOKYO 1961.7.11東京・高円寺宛, 杉並36.7.13着印

イベント情報 イベント情報 イベント情報 イベント情報 イベント情報

1) 「福岡・天神 切手・コインまつり」

日時：令和3年7月2日（金）～4日（日）

場所：エルガーラホール7階多目的ホール
福岡市中央区天神1丁目4番2号

2) スタンプショウかごしま2021

日時：令和3年10月2日（土）～3日（日）

場所：NCサンプラザ（サンプラザ天文館）3階会議室
〒892-0842 鹿児島市東千石町2-30

3) スタンプショウはかた2021

日時：令和3年10月16日（土）～17日（日）

場所：TKPカンファレンスシティ博多
〒812-0011 福岡県福岡市博多区博多駅前3-19-5 博多石川ビル 1F

※ 上記イベントは現在の予定です。中止・変更になる可能性がありますので、主催団体へご確認ください。